

都道府県別賞一等

見えない優しさ

鳥取県 鳥取大学附属中学校 二年生

黒崎 百花

私が四歳の時、祖父が胃ガンで亡くなりました。当時の記憶は幼かったこともあり、ほとんど残っていませんが、家族の中でその出来事がどれほど大きな影響を与えたのか、少しずつ理解してきました。その一つに、生命保険の存在が深く関わっていると気づきました。

私が覚えているのは、母が泣いている姿と棺に花を入れたことくらいです。まだ幼かった私には、なぜ母が泣いているのか、なぜ祖父が動かないのかすら分からなかったけれど、大人たちが困難な状況に直面している様子を感じていました。後になって祖母から聞いた話によると、祖父が生前、生命保険に加入していたおかげで、家族が経済的に困ることなく葬儀を執り行うことができ、またその後の生活も支えられていると言います。

生命保険という言葉は、当時はよく分からなかったけれど、家族の安心感と、その後の生活が守られているということを知り、保険というものが大切な役割を果たしているということに少しずつ感じ始めました。特に、祖父がガンになった際に、医療保険やガン保険がどれだけ家計の助けになったのか祖母から聞いて、私は、『もしもの時に備えておくことがとても大切なのだな。』と実感しました。

そして、私は少し成長し、保険に関する話を身近で聞くようになりました。母が「あなたも保険に入っている。」と言っていたことがありました。それを聞いて、私は『祖父の時のように、母も家族が困らないように準備しているのだな。』と感じました。今では、大人になったら、家族や自分自身を守るためにも自分で保険に加入しようと思っています。

生命保険は、単にお金を残すためのものではなく、残された家族を守るための「見えない優しさ」だと思います。もしも自分が病気になったり、事故に遭ったりしたとしても、大切な人たちが困ることなく、安心して暮らせます。祖父が生前に準備してくれたことがいかに私の生活の支えになったかは、時間が経つごとに深く感じるようになりました。

私は祖父が亡くなった時のことをほとんど覚えていませんが、その後の家族の生活がどれだけスムーズに進んだのか、そして生命保険がどれだけ役立ったのかを聞くことで、その存在の大きさを理解しました。祖父が準備してくれていたからこそ、私たち家族はその後の悲しみや困難を乗り越え、少しずつ日常を

第63回中学生作文コンクール

取り戻すことができたのだと思います。

これから自分も大人になり、社会人として働くようになれば、自分や家族を守るために生命保険に加入することが必要だと考えています。大切な人を守るため、もしものことが起きた時にどう備えるのか、それを考えることが、私たち一人一人の責任であり、愛情だと思うからです。

生命保険は目に見えない存在ですが、その影響はとても大きいものです。今はまだ中学生で、保険を実際に使うことはありませんが将来、自分が大人になった時には、家族のためにも自分のためにも、しっかりとその大切さを理解し、備えておこうと思います。祖父が示してくれたように、「もしもの時」に備えることで、安心して暮らすことができるのだということを、私はこれからも大切にしていきたいです。